

慢性C型肝炎を合併しインターフェロンを投与したが、インスリン非依存状態が持続した緩徐進行1型糖尿病

須永 雅彦¹⁾²⁾, 堀江 篤哉¹⁾, 金塚 東¹⁾
(千葉中央メディカルセンター糖尿病センター¹⁾, 同 消化器内科²⁾)

Key words ▶

緩徐進行1型糖尿病
インスリン非依存状態
慢性C型肝炎
インターフェロン治療

要 旨

症例は49歳男性。32歳で糖尿病診断、インスリン療法が導入されるも中断。49歳当院初診時の血糖346mg/dL, HbA1c 7.7%, 抗GAD抗体230 U/mLで緩徐進行1型糖尿病と診断。疾患感受性と抵抗性HLA遺伝子型を有す。DPP-4阻害薬と持効型インスリンにより治療開始。慢性C型肝炎に対しペグインターフェロン・リバビリン・テラプレビル療法を施行、副作用にて1ヵ月半で終了するがHCVは消失。その後もインスリン非依存状態が持続した。本症例の経緯はC型肝炎の治療が、疾患抵抗性HLA遺伝子型を有する緩徐進行1型糖尿病を悪化させることなく実施できる可能性を示唆し、多数の症例で検討する必要がある。

○はじめに○

緩徐進行1型糖尿病は、経過とともにインスリン分泌能が緩徐に低下し、発症後最短で3ヵ月を過ぎてからインスリン療法が必要になり、高頻度にインスリン依存状態となる。発症からインスリン治療開始までの平均期間は78ヵ月である¹⁾。特に抗GAD抗体価が10 U/mLを超えると急速にインスリン分泌能低下が進行するとされる²⁾。また、インスリン抵抗性が強いほど進行が早いとされる³⁾。しかし、抗GAD抗体価が高値であっても長期にわたりインスリン治療を必要としない症例も認められ、発症(診断)後10年以上経ってもインスリン依存状態に進行しない

症例が報告されている⁴⁾。

一方、慢性C型肝炎に対するインターフェロン治療により、1型糖尿病を発症する⁵⁾、あるいはインスリン抵抗性が悪化することが報告されている⁶⁾。そのため、特に1型糖尿病を合併した慢性C型肝炎の症例では、当初からインターフェロン治療自体を断念することがある。

われわれは、長期間にわたりインスリン非依存性が継続した、疾患感受性と抵抗性HLA遺伝子型を有する緩徐進行1型糖尿病に、合併する慢性C型肝炎に対して施行したペグインターフェロン・リバビリン・テラプレビル療法によりC型肝炎ウイルス(HCV)は消失し、また治療後に血糖コント

ロールは悪化せずインスリン非依存性が持続した症例を経験したので報告する。

○症 例○

患者：49歳，男性
診断：1A型糖尿病（緩徐進行1型糖尿病），慢性C型肝炎
主訴：なし，糖尿病教育入院
既往歴：13歳虫垂切除，37歳HCV抗体陽性指摘，48歳足壊疽のため左第4，5趾切断
家族歴：父方祖母が糖尿病
体重歴：25歳時過去最大体重95kg
嗜好歴：飲酒なし，喫煙15本/日×30年間
生活歴：規則的な寮の食事（糖尿病食